

主要科目の目標、特長

(人間学研究科 人間学専攻／保育学コース)

授業科目の名称	目 標	特 長
乳幼児発達心理学研究	乳幼児期から児童期における子どもの発達を、人、もの、世界とのかかわりの中でとらえ発達の過程、親やきょうだい、教師の役割を通して子どもの心の世界と社会化の過程を理解する。特に、子どもの中で「人の心を理解するところ」がどのように育ち、転換期を向かえるのか(認知の発生と発達)、人間を特徴づける機能であることばが話せるようになる道筋(言語発達の特徴と認知的基礎)と、ことばを話すということの意味(言語発達の社会的・文化的側面)やことばを操る脳機能(言語発達の生物学的・神経学的基礎)など、最近の発達心理学研究の成果から討論すると共に、その研究方法などについても考察する。発達理論を基に量的・質的研究の文献を講読・ディスカッションする。	乳幼児期の子どもの発達過程を子どもの心の世界と社会化の中で理解する。特に認知発達、ことばの発達、社会性の発達等に関する文献を講読し量的・質的研究の研究法や研究成果と保育の実践との関係を討論する。
保育臨床特別研究	本講では、保育現場での臨床、支援方法、アセスメント、コンサルテーション、保育者、子ども、保護者への支援の方法について理解することが目的である。その結果、保育現場での臨床活動を行い、保育者、子ども、保護者への支援が行えるようになることが到達目標である。	保育学の専門家が、気になる子、障害を持っている子どもなど、スペシャルニーズのある子どもの保育や、保護者支援を担当したり、担当保育者へのコンサルテーションが可能となるための、知識や実践について学び、臨床発達心理学を実践できる保育者の養成を目指した科目である。
保育実践研究	現在の保育のおかれている状況を社会、心理、歴史等から多面的に分析し、保育のありかたを改めて問い直す。特に、以下の理解を深めることを目標とする。 1. 保育の現状について分析的に読み取ることができる。 2. 日本の保育の歴史を理解できる。 3. さまざまな保育、教育思想と保育を関連づけて理解することができる。	様々な資料を受講生自身が考察、討論することで思考力、論理性の向上をはかる。また保育者としての経験や実践を省察し、自らの問題意識や課題を深め、各自の研究に生かす。

主要科目の目標、特長

(人間学研究科 人間学専攻/社会福祉学コース)

授業科目の名称	目 標	特 長
福祉社会学特別研究	<p>現在のわが国は、少子高齢化や人口減少の著しい進展、ならびにグローバル化の進展とともに格差の拡大も進捗し、社会の大きな転換期を迎えている。本研究では、そうした社会状況の進展を正確に押さえつつ、個々人のwell-beingを社会的にどう実現していけばいいのかを社会的に研究・検討していく。「制度政策論」はもとより「技術方法論」にも目を向け、社会福祉の目的である「人間の福祉の実現」にのっての必要・十分条件をマクロ・ミクロの2つの側面から検討し、福祉レジーム論、共生論、コミュニティ論、家族福祉、ジェンダー、シティズンシップ、セルフヘルプグループ、エンパワーメントなどのミクロ・マクロな視点にも着目する。その上で、現在の社会制度や政策を実際の社会的諸関係や社会的変化の中に位置づけなおすとともに、福祉制度のシステム設計やその展開、あるいはそのシステム設計の前提をなしている理念や価値等にも目を向け、臨床心理学、臨床福祉社会学的視点から、社会福祉の援助実践に関しても検討していく。</p>	<p>社会福祉のあり方が問い直されている現在、まず求められることは、現実の社会関係や社会変動の中に今日の社会福祉を可能な限り位置づけ直すことである。そしてそのシステム設計の前提や実践の前提となっている価値観やものの考え方を明確化する必要がある。本講義では特に家族、労働、地域社会のあり方に焦点を当て、その実態や変動を押さえながら、受講者とともにその前提の明確化を図りつつ、「人間の福祉の実現」に向けての社会的条件に関する思考実験を展開していきたい。</p>
高齢者福祉特別研究	<p>わが国の高齢者福祉の歴史的な流れを学ぶ。高齢者問題とその対策について歴史的に振り返ることで、現在の高齢者福祉を取り巻く課題について改めて検証することが本講義の目的である。古代、中・近世の老人救済から始まり、明治、大正、昭和戦前期と、昭和戦後期から今日に至る高齢者福祉対策について概観する。その中で、高齢者観の変遷とエイジズムの問題、さらに老後保障制度、在宅福祉、入所型施設等各種事業などについても学ぶ。また、特に昭和戦前期の養老院に関しては、浴風園という施設を事例として、養老院の機能、役割、実践等について検討していく。それらを踏まえ、今日の養護老人ホーム、特別養護老人ホームなどの入所型施設における課題や、在宅福祉における課題について整理し、検討していく。</p>	<p>授業においては古代、中・近世の老人救済から、明治、大正、昭和と時代順に文献・資料に基づきその変遷について学んでいる。また、昭和戦前期については、浴風園の入所者記録をもとに事例検討を行い、戦前期の困窮した高齢者の生活実態とそれに対する支援がどのように行われていたのかについて検討している。特に施設の役割と地域における方面委員の役割をみていくことで具体的な処遇の課題を検討している。さらに、高齢者観の変遷を踏まえエイジズムの問題など今日の高齢者福祉の課題について考察していく。</p>
社会福祉学研究	<p>社会福祉学は、社会福祉政策、社会福祉制度、社会福祉の専門援助活動（ソーシャルワーク）によって構成される。本講義では、社会福祉の発展史、社会福祉固有の視点、社会福祉的援助の原理について検討する。社会福祉学についての基礎的かつ原理的な理解を獲得することが目標となる。</p>	<p>岡村重夫（1983）『社会福祉原論』をテキストとして用いる。救済事業から、保護事業、福祉国家、現代の社会福祉に至るまでの社会福祉の発展史における、処遇原則の変遷に注目する。社会福祉と、社会保障、雇用、医療、住宅、教育などの各種の生活関連施策とを区別する社会福祉固有の視点について検討する。社会福祉的援助の原理、すなわち社会性の原理、全体性の原理、主体性の原理、現実性の原理についてその意味内容を明らかにする。また岡村の所説に対する批判についても検討する。</p>

主要科目の目標、特長

(人間学研究科 心理学専攻/心理学コース)

授業科目の名称	目 標	特 長
心理学研究法特殊研究	<p>学術論文を批判的に読みこなす能力は、研究遂行上必要不可欠である。本講は、「査読」をテーマに主に演習形式で進めていく。受講者は、自分の興味関心に従い、心理学及び関連分野の雑誌論文を選定し（審査のあるもの）、その論文を熟読し関連研究を調べた上で、論文の概要・査読コメントをレジュメにまとめ発表する。その際、研究法に力点を置いたコメントをする。発表を受け、受講者全員で討論する。討論を通して、心理学研究遂行上必要となる視点、スキル等を養う。また、必要に応じて、心理データの解析に必要なコンピュータ言語の演習を実施する場合もある。</p>	<p>査読とは、学術誌に投稿された論文が一定水準に達しているか否かを審査するために読むことである。そうした行いは「プロ」の研究者が日常的に行っていることであるが、それを大学院生時代に「真似て」おくことに大きな意味がある。そうした活動を通して心理学研究法についての理解が深まり、修士論文の研究計画の洗練につながっていくことが特長である。</p>
発達心理学特殊研究	<p>人間の発達の様相とそのメカニズムを理解することを目的とする。具体的には、認知、思考、社会性、言語という各領域について、生涯発達という観点からとらえる。また、発達理論を概観すると同時に、子育てや教育などの現場における支援にも触れていく。本講を通じて、 1) 人間の発達に関する知識を系統立てて説明ができ、発達という観点から人間を理解できること、2) 多様な発達研究に触れ、その成果や意義を評価し学習者自身の研究活動に援用できるようになること、3) 教育や発達臨床の専門家養成を見据えて、個性としての人間の特性の理解とその発達の变化へのアプローチを獲得することを到達目標とする。</p>	<p>これまでの発達心理学の知識を基礎として、近年の発達研究の動向や具体的な研究法から、人間の発達過程を概観する。子どもの個性と環境要因との相互作用、保育や教育の現場における、気になる子どもや障害をもつ対象者への支援やコンサルテーションの事例についても取り上げる。以上の事を講義形式と学術論文の輪読および討論を通して、研究者や実践者といったそれぞれが目指す立場から考察し理解を深める。</p>
生理心理学特殊研究	<p>心理学における生理反応計測は長い歴史を持つが、近年こうした計測手法の飛躍的進歩が見られる。本授業ではこうした計測機器の操作に慣れ、計測の実際的使用を試みることによって、臨床系/実験系に関わらず生理心理学的アプローチに親しむことを目的とする。具体的には心臓血管系反応の測定および分析、眼球運動反応の測定および分析を通して具体的な機器の操作および分析手法に慣れることで、心理学における生理反応計測の意義について体験を通じて学んでいく。既存知識や既存スキルは必要としないため、同機器の操作に興味のある人すべてが受講対象となる。 さらに生体反応測定の時間の合間に生理心理学、特に神経科学に関わる内容の講義を行う。近年注目されている脳と心の関係についての興味深い事象（意識と脳、分離された脳、言語と脳、感情と脳、ブレイン-コンピューターインターフェース、幻視現象、その他）についての講義を行うことで、「こころ」を対象とする学問における生理心理学的アプローチの重要性について考察する。</p>	<p>実体験を通じて主観的測度の心理学における重要性と同時に客観的測度の重要性を学ぶことができる。生理的指標を測定、分析する方法を実体験を通じて学ぶことで、テキスト等を介して同方法を学習することに比較して圧倒的に適用可能性の高いスキルを身につけることができる。さらに、主観的な「こころ」の世界を自然科学的手法でアプローチする意義について考察する力の伸張も期待できる。また、実験の合間に行う講義およびディスカッションを通じて、実体験を通じて得た生理指標の測定スキルの意味をさらに深く理解することができる。主観と客観の両面から「こころ」にアプローチする心理学という学問をより深耕する機会となる。</p>

主要科目の目標、特長

(人間学研究科 心理学専攻/臨床心理学コース)

授業科目の名称	目 標	特 長
臨床心理面接特論 I (心理支援に関する理論と実践)	<p>クライアントの心的世界に同行し、公認心理師・臨床心理士として心理的支援をするための各種面接法の理論的、実践的考察を習得できることを目的とする。</p> <p>【概要】心理療法とは、各種アプローチの理論と方法、それらの応用、状態に応じた方法の選択を症例とともに学ぶ。</p> <p>【到達目標】(1) 心理療法の基本的姿勢と始まりから終結までの流れを考察・説明できる。(2) 力動論に基づく心理療法の理論と方法を説明できる。(3) 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法を説明できる。(4) 心理に関する相談・助言・指導等への応用を説明できる。(5) 心理に関する支援を要する者の特性に応じた適切な支援方法の選択・調整を説明できる。</p>	<p>「病」「問題」の建設的・破壊的両面を捉え、精神病理・クライアントの心の物語、モチーフを精査した多次的見立ての基に行う心理面接プロセスを学習する。多くの事例を読み、基本的態度から面接の始まり～終結までを、実践的に習得することを目標にしている。神経症～境界性人格障害～精神病、発達障害、器質的障害から各種心理支援、対象者として、幼児から高齢者、その関係者までを心理面接している臨床心理士が実践的に教育している。</p>
臨床心理基礎実習 I・II	<p>臨床心理に関する基本的態度、倫理、行政、面接法(言語的・非言語的)、各種査定技法などを、本実習を通して、また実際的に事例を通して学んでいくことを目的とする。授業では、内外の臨床心理実習、実習報告、個別・グループスーパーヴィジョン、事例検討会、ロールシャッハ・テスト事例検討会をユニットとした実習・演習形式で行う科目である。</p> <p>本実習を通じて、(1) 実践的に臨床心理の活動ができる、(2) 臨床心理士の働く各職場での短期実習(外部実習)にて、実践的な関わりができることを到達目標とする。</p>	<p>修士課程 1 年生の必修科目であり、実習や演習を含むため 2 コマ連続の実習形態を特長とする。原則的には、ふじみ野キャンパスで行われるが、実際に実習生として事例を担当する本郷キャンパスの臨床心理相談センターにて、ロールプレイなどの実習も行われる。当該科目では、他の必修科目・選択科目で理論や技法を学んで上で、心理の専門職に必要な実践、資質の向上を目指していく。</p>
福祉分野に関する理論と支援の展開 (老年臨床心理学特殊研究)	<p>高齢社会の現状や老化のプロセス、健康な高齢者の諸心理機能を踏まえた上で、臨床心理学の観点から高齢期の心理臨床を理解し実践に生かすことを目的とする。具体的には、各種文献による最新の知見から、老年臨床における心理的援助やアセスメント手法について受講者らによる発表を取り入れながら知識を深める。また、病院や施設における実際の事例から諸問題への支援方法などについて検討することを特長としている。</p> <p>本講を通じて、(1) 高齢期に生じやすい疾患に対する知識を列挙することができる、(2) 高齢期の諸問題に対する心理的援助方法・心理臨床に必要な査定法について具体的に説明することができることを到達目標とする。</p>	<p>多様な高齢者を対象とした心理臨床を行う上で必要となる知識やスキルの習得に向けたプログラム構成を特長としている。基礎知識に関する理解に加え、老年臨床におけるさまざまな事例の検討、アセスメントや心理的援助の施行に必要な実践的スキルを習得するため、一部、演習を取り入れている。</p>